

捕食者 ☒ 朧 ☒

ごま塩とんぼ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球を訪れ、戦いで命を落とした筈の異星の捕食者。彼が次に目覚めたとき、そこは見知らぬ世界だった。傍らに寄り添う異星の戦士と共に、捕食者が目指すのは——これは、どこかの異星人たちの物語。

プレデターとカービィとHUNTER×HUNTERのクロスです。不定期更新ですが、なんとか頑張ります。あと、擬態ですが擬人化に当たる展開が予定されておりますので、苦手な方はご了承ください。

目次

その、始まり	1
出会い、その予感	10

その、始まり

とある日本の離島。

雑木林の合間を縫うように作られた細い道を、一台のダンプが凄まじい速度で突っ走っている。

本来ならば間違いなくスピード違反であり、なにより危険極まりない乱暴な運転。だがしかし、運転手を勤めるプロンドの女性はそれを気にする余裕など無い。

「ツ!!」

大きな石に一部のタイヤが乗り上げたのか、ダンプが激しく跳ね上がる。

それを何とか持ち堪えると、女性はハンドルを確りと握り締めてアクセルを踏んだ。ブレーキは掛けられない。

此処で止まってしまつたら、確実に勢いが足りなくなる。

額から珠のように流れる汗を気に止める事無く、女性は片手で太腿に挟んだ無線機を操作し叫んだ。

「そっち! どうなってる!?!」

『「グイーン」なら、今「アイツ」が抑えてるよッ! そっちはどの辺だ!?!』

「もうちよつとだわ！ 忌々しい鳴き声が聞こえた!!」

無線機の向こうから現状を叫ぶ男性に、女性は前方を注視しながら答えた。

木々が開け始め、そのずっと向こう——終点である崖の淵辺りで、大きな影が暴れているのが女性の視界に入る。

影は目測だけでも八メートルほどあり、手足は長く体は外骨格のようで黒光りしている。

顔は目らしき部分が見当たらず、頭部は後方に伸びて刺々しく広がり牙は剥き出し。

長い尾を振り乱し、獰猛さが滲み出ているそれはどう見ても禍々しい怪物で、どう見ても地球上の生物では無かった。

その体には幾重にも鎖が巻きつけられて杭を穿たれており、その上から更に巻きつけたワイヤーは怪物の動きを阻害し続けている。

そしてその背に取り付き、怪物に巻きつけたワイヤーを力任せに引き絞って振り解かれないようにしているのは人型の影。

三メートル近くはあるかというがっしりとした体躯に、戦いで薄汚れている鎧と白を基調とした和服のような衣類を身に纏い、顔には半壊したマスクを被っていた。

確かに人型だが、“彼”も間違いなく地球人類ではない。

怪物との戦いで受けた全身の傷からは緑色の血液が流れ、取り返しのつかない傷も幾

つかある。

「きたぞオオー!!」

離れた木々の上に登っていた軍服姿の男性が、白装束の異形に向かって叫ぶ。

男性の言葉通り、雑木林の中から先ほどの女性が運転する一台のダンプが崖目掛けて疾走していた。

ここまで、手筈通り。

ダンプの女性も木の上の男性も、白装束の“彼”を見た。

半壊したマスクから、金色の瞳が二人を睨み返した——少なくとも、二人はそう感じた。

金色の目は、作戦に変更は無いと、そう言外に語っている。

ダンプに気づいた怪物が牙を剥こうとするが、異形はそうはさせまいと怪物の背に槍を突き刺した。

女性がアクセルを更に踏む。

崖まで数十メートルのところで、女性は持っていた無線機を足で無理矢理アクセルに固定し、ドアを開けた。

気合の掛け声と共に、女性が運転席からそのまま飛び降りる。

既に木から下りて駆け寄っていた男性が女性を受け止め、その勢いで背後の草むらへ

ボールのように転げていった。

無人となったダンプはトップスピードのまま、怪物へ正面衝突を果たす。

動きを抑えられていた怪物は踏ん張る余裕も無く、ダンプに押し切られそのまま崖下へ放り出された。

「■■■■■■ ツッ!!」

ダンプごと落下しながら形容しがたい叫び声を挙げる怪物の背で、共に落下する異形が微笑に笑う。

これだけで怪物を倒せる、などと思っではいなかったのだ。

白装束の懐からこぼれ掛けた歪な丸いピンク色のマスコットを右手で危なげなく掴みとり、異形はそれを一瞥して確りと握り締めた。

異形が自身の左腕を虚空へと突き上げ、咆哮する。

その腕に取り付けられた薄べったい機械のモニターに表示されていた赤い電子文字が——自爆装置のカウントダウンが、ゼロを意味する文字を表した。

異形の視界が、閃光の白に染まる。

左腕の装置が起爆し、その爆炎はダンプのエンジンに着火して更に大きな爆発を起す。

辺り一体が真昼のように明るくなり、それと同時に地響きするほど派手な爆発音が遠

くまで響き渡った。

草むらからよめきつつ出てきた女性と男性が、爆炎を見つめる。

「……終わった、のか」

「……ええ」

決死の作戦により起こされた爆発は、怪物を粉々に打ち砕いた。

怪物の背に取り付いていた異形もろとも。

二人は戦いの終わりを悟ったが、払った犠牲があまりにも大きいことを痛感した――

そこから数キロほど離れた場所に建つホテルには、沢山の人が集まっていた。

ホテルは緊急の避難場所とされ、島中の人々が不安そうに過ごしていたのだ。

「ねえ、今の」

爆発音を聞いた住民たちが窓の外を見てぎわめいている傍らで、窓に張り付いていた男の子と女の子が、隣に居た老婆を不安そうに見上げた。

「おばあちゃん、今の、どっかーんってなったの、■じゃないよね？」

「■、悪い怪獣やっつけて帰って来るんだよね？」

今にも泣きだしそうな幼子を見つめ、老婆は沈痛な思いを胸に抱く。

「……■なら、きつと悪い怪獣をやっつけられるよ」

幼子たちをそつと抱きすくめ、自分にも言い聞かせるように老婆はそう呟いた。後ろに居た幼子の父親と母親も、表情は優れない。

老婆と同じように、薄々悟っているのだ。

戦いに出た異形……新たな家族が、もう戻ってこないことを。

過ごしたときはたった一ヶ月でも、彼ら一家は異形を間違いなく家族と認識し迎え入れていた。

老婆が仕立てた白装束を、異形が受け取って着込み戦いの地に赴く時、別れる前に見た背から覚悟を感じたのをそれぞれの胸に思い起こす。

一家はいまだ遠くで立ち上り続ける黒煙を窓越しに見つめ、静かに涙を流した。

爽やかな風が、肌を撫でる。

爆発で生じた熱風などではなく、爽やかな草原を駆ける穏やかな風だ。

異形が重い目蓋を辛うじて開けると、二十センチほどのピンク色をした丸い物体が薄らと視界に入ってくる。

爆発の直前右手に確りと握った、あの歪なフェルト製のマスコットを……それを手渡ししてきた地球人類の子供二人を、異形は脳裏に思い起こした。

丁度そこへ、顔目掛けて冷たい水が緩い水鉄砲のように掛けられる。

不意打ちで食らった冷たさに、異形は思わず短い唸り声を上げた。

「ぼよい? ……ぼよー!」

水を掛けた犯人が、不思議そうに異形の顔を覗き込んできた。

そして異形が目を覚めたのだと気づくと、嬉しそうに跳ね回る。

異形は怪訝な表情をして、ケコココ、と小さく声を出した。

それを聞いたピンクの生き物は無い首をかしげて、ぼよぼよと鳴いて答える。

ここはどこだ?

わかんない。

ピンクだま相手にそんな意味の応酬をして、異形はようやく半身を起こした。

起き上がったそこは、青々とした草が生い茂る平原だった。

体を確認すると負っていた筈の傷が無くなっており、鎧や人間の老婆から譲り受けた

白装束も汚れが消え、破けていた箇所が直っている。

右腕の収納式鉤爪・リストブレードが付属されたガントレットも、左腕の薄べったい機械・リストコンピュータが付属されたガントレットも健在。

不思議に思いながら傍らを見ると、半壊してその意味を成さなくなっていた筈のマスクが傷ひとつ無い状態で転がっていた。

それを手に取り、異常が無いことを確かめてから顔に被る。

マスクに搭載されている視覚補助機能が作動し、異形の視界がクリアになった。

それから視覚補助カメラを赤外線モードに切り替え、辺りを見回す。

念のためモードをいくつか切り替えながら見る限り、近くに生体反応は無い。

センサーも起動してサーチすると、センサーは遠方にいくつか生体反応をキャッチした。

「ぼよ」

声を掛けてきたピンクだまに、異形は振り返る。

「ぼよ……おぼろ」

にこやかに片言で喋ったその言葉に、異形はマスクの下で僅かに目を見開いた。

おぼろ……オボロ……臚。

ピンクだまと同じ姿の歪なマスクottを渡してきた子供たちと、その家族だけが呼ん

だ異形の愛称にして、もうひとつの名。

「カービィ、おぼろと、いっしょ」

カービィと名乗ったピンクだまは、異形——朧の傍らへ寄り、朧の纏う白装束の右袖を確りと掴む。

（おまもりだよ）

（朧のこと、一緒にいて守ってくれるからね）

子供達の言葉を思い出し、朧は暫し瞑目した。

「カー、ビィ」

「ぼよ」

朧が片言で呼ぶと、カービィは淀みなく返事をする。

それを聞いてから朧は立ち上がり、生体反応を感知した方向見た。

カロロロ、と出立の意味で低く鳴き歩み出すと、カービィは元氣良く後を付いて歩き出したのだった。

出会い、その予感

最初に世界を自覚したとき傍にいたのは、二人の幼い子供だった。

フェルトと綿と刺繍糸で作られた歪な体は、子供たちが試行錯誤して想いを籠めながら作ったのだと、なんとなく悟った。

「かーびい」

柔らかな伸びかけの黒髪を可愛らしい飾り付きのヘアゴムでふたつに結んだ、五歳ごろの少女が舌つたらずな調子でフェルトのマスコットのをそう呼ぶ。

隣にいた八歳ごろの黒髪を短く揃えた少年が、少女に寄り添って同じようにマスコットを見つめた。

「これからね、おぼろが、悪い怪獣やつつけにいくの。ほんとほね、おぼろが星^{おぼろ}にちゃんと帰れるようにって思ってた兄ちゃんを作ってたんだけど……」

そこまで言って、少女が言葉を詰まらせる。

不安そうな、泣き出しそうな、複雑な表情になった少女を見て、隣の少年が少女の頭を撫でた。

「カービイは星の戦士だから、きつと臆のこと守ってくれるよ」

少年が、自分の胸中に宿る不安を気取られぬように表情を取り繕いながら、目を潤ませる少女を励ました。

俯いていた少女は顔を上げて少年を見ると、こくりと黙って頷き、手中のマスコットを再び見つめる。

「じゃあ、おねがいね、カービィ。おぼろの、お守りになつてね」

第弐話：彼らの、出会い

臚は、自身の後ろをついて来るカービィを見た。

マスコットの時は確かに動植物の毛や化学繊維で構成されていた筈だが、様々なスキャンを重ねて見るとカービィはれっきとした生き物になっている。

内部の詳しい構造や骨格は検出されなかったが。

手の平に収まる程度のサイズだったものが、今や二十センチの綺麗な球状をしたピンクの知的？生命体だ。

この見知らぬ土地といい、理解できない事柄が立て続けに起こっている。と、臚は密

かに悩む。

そうこうしながら十数分ばかり歩くと、歩幅が違いすぎるため段々追いつけなくなつたカービィは、空気を吸い込んで宙に浮くと短い手をバタつかせ、ふわふわと上下しながらホバリングで移動するようになった。

空を見上げると、高高度を飛ぶ生体反応がいくつか検出される。

それらをズームで確認したが、普通の鳥から地球上には生息していなかった生物まで飛行していた。

辺りに生える植物の特徴からしても、臃はどうやら今いる場所が地球ではないらしいと悟る。

それから更に数十分ほど歩いて草原を抜けると、臃とカービィは背の高い広葉樹林地帯へ入った。

臃は歩みを止め、マスクのセンサー機能で生体反応の位置を再び探る。

二人が居る位置から前方百メートルほど離れた位置に感知した複数の反応を、ビジョンを切り替えながらセンサーで細かく見ると、それは大きな四足歩行の生き物だった。

鼻は体と同じくらい大きい、形からしておそらく地球にも居た豚と同じような生物だろうと臃は考えた。

地球の豚と唯一違うのは、この豚がとある国立公園に生息する非常に凶暴な性質を

持った豚『グレイトスタンプ』の黒色近種である事だが、二者がこれを知るのはだいぶ後のことだ。

臃が豚の群れをマスクのビジョン越しに眺めながらどうするか考えていると、足元からグルル、というまるで獣の唸り声のような音が聞こえた。

怪訝に思つて音の位置を見ると、カービイが腹と思しき箇所を両手でさすっている。

暫し見つめ合つた後、ケココという顫動音せんどうおんと、ほよほよという気の抜ける人間が聞いただけでは理解し難い固有の言語で会話する二者。

腹の虫か。

うん、おなかすいた。

臃は暫し考えた。

カービイは狩りが得意なようには見えない。

むしろ逆に狩られそうなほど、のほほんとした容姿をしている。

となれば、ここは当然狩猟に長けた種族ブレイダーである自分が手頃な獲物を狩るのが妥当。

そう思考を帰結させると、臃はマスクの内側に備え付けられた制御装置を口周りの触脚で操作し、光学迷彩クロッキングデバイスを起動させてカービイを空いている右肩鎧に乗せる。

すると、臃に密着したカービイにも迷彩の効果が働き、臃と共に身体へ一瞬青い電光が走った。

二者の身体に反射する光の屈折率が迷彩効果で捻じ曲げられ、瞬く間に辺りの景色と同化して姿が透明になる。

光学迷彩クロウキングデバイスが問題なく働いたことを確認すると、隼は近くにあった背の高い広葉樹の枝から太いものを選び、その上へ跳躍した。

危なげなく飛び乗ってから、先程見つけた豚の群れの動きをよく観察する。

豚たちは周りに生えた草を食むことに集中しているようで、発見した時から殆ど移動していない。

隼は息を潜めながら豚たちの方へ近づき、獲物が自身の『狩り』の射程距離に入るように木から木へ跳び移り移動する。

いくつか狩りの手段を考えたが、今回は手っ取り早い方が良いだろうと判断したのだ。

人間でも肉眼ではつきりと目視できる十分な距離まで来ると、群れの輪から離れたところで餌を探している個体に狙いを定め、マスクのレーザーポインターを起動させた。赤い三つの点で逆三角を形どるソレが真っ直ぐに伸び、丁度黒豚の額を照らす。

それに連動して左肩鎧に備え付けられたプラズマキャスターが起動し、エネルギーチャージを始めた。

青白いプラズマが辺りへ僅かに走り始め、エネルギーの充填完了を知らせるシグナル

がマスクのビジョンに表示されたのを確認すると、臙は躊躇わずプラズマエネルギーを発射する。

閃光は黒豚の頭部をほぼ真上から貫き、黒豚は断末魔を上げる暇もなく突つ伏して事切れた。

突然のことに豚の群れが騒然となったが、襲撃者の姿が見えないため混乱したのか皆興奮しながら他所へ走り去る。

それを見送りながら臙は迷彩を解除すると音もなく地面へ下り、仕留めた獲物を確認して自分の腰に巻いてある金属製のベルトを探った。

やはり、先の戦いの最中で失ったはずの装備が何事もなかったかのように納まっている。

その中から頑丈なワイヤーを取り出すと仕留めた豚の足に手早く巻きつけ、ビジョンを切り替えながら他に生体反応が無いのを調べると、付近に存在する岩場の方へ運び始めた。

臙が豚を解体して焼くことをカービィに伝えながら岩場まで来ると、カービィは食事待ち遠しいのか率先して薪を集めに行く。

短い手では持てる枝も高が知れているが、落ちている枯れ枝等を忙しなく動き回って集め始めたカービィを見て、臙はそのまま集めて貰うことにした。

手ごろな大木の枝にワイヤーで縛ったままの獲物を逆さに吊るし、右手ガントレットの装備であるリストブレードを展開する。

ガントレットから飛び出したその三本の鋭利な鉤爪で、獲物の太い血管がある首の部分をさつくりと切り裂くと、逆さ吊りの状態であるがため切り口からは血が流れ出始めた。

臃はその様子をしばらく見守ってから、豚の皮を器用に引き剥がす。

血抜きの間、岩場の反対側へ移動すると、少し離れたところに落ちている大きめの石で火起こしのための囲いを作り、集められた薪をその円の中に放り込んで手際良く火を起こした。

「ぼよん」

暫くして薪を集め終わったカービイが、薪を頭上に持つて臃の元までやって来た。

臃が顫動音せんどうおんで答えると、カービイはそのまま火の近くへ寄つて薪を下ろす。

そして息を吸い込んだかと思うと、その見た目にそぐわぬ肺活量で火の勢いを調整してみせた。

自慢げに胸（のような部分）を張るカービイを感心して称えると、カービイは嬉しそうに張り切つて火の番を名乗り出る。

つづらな瞳をきりりとさせて焚き火を見つめるカービイに火の番を任せ、臃は獲物の

解体作業に移った。

カービーが火の番をしている岩場の反対側で樹上から下ろした獲物をさつさと解体し、腰に備えた伸縮性の炸裂槍を地面に突き刺して展開する。

弾頭の槍が地面に向かって複数本展開し、それを地面から引き抜いて幾つかの肉に刺して肩に担ぎ、火の元まで戻った。

大きな豚肉の塊を感動的な表情で見上げはしゃぐをカービーをなだめ、肉を刺した槍を太い枯れ枝二本を支えにして火にかざし、豪快に焼き始めるのだった。

臙は、ひとつの問題に気づくハメになった。

この世界（おそらく地球とは別の惑星）に来てからはじめての食事は味に問題はなかったのだが、その量に些か問題がある。

多いのではない、むしろ逆だ。

臙の食事は至って普通であり、人間の成人男性とさほど変わりはない。

だが体長二十センチ程度のカービーの食事は、あたかも巨大生物級であった。

かなりの大きさであるグレイトスタンプ亜種の黒豚の肉は、八割、否、九割方がカービーの胃袋へ消えていったのだ。

残り一割の肉でも臙は充分に腹が満たされたのだが、今後のことを考えると少々頭が

痛い。

黒豚のような大型の獲物がいつもいれば良いが、小型の獲物しかない場合は相当な数を狩らなければいけないようになるだろう。

そうなれば現地の生態系にも影響を及ぼし、隴の種族の掟にも反する。

上手い解決策を考えなければならぬと思いつながら、隴は焚き火の始末をするとカービイを見た。

カービイは満足したのか、口周りが油でテカテカしたまま嬉しそうにぽよぽよ話しかけてくる。

……とりあえず、みつともないので口周りを拭わせた。

その後、飲み水がないため水場を探しに行くことに決めると、隴とカービイは連れ立ってその場を後にした。

それから程なくして、二者が立ち去った後にひとりの男性が現れた。

「なんだ、誰か居たのか？ ココ」

焚き火跡を見て、立ち入り禁止の筈なんだけどなあ、とぼやきながらその男性は生えかけの無精髭をジヨリジヨリと擦る。

ボロボロの衣服に古ぼけた外套を羽織ったその姿は、まかり間違えば浮浪者のよう

だ。

男性は焚き火の周辺を見回って、すっかり食われた後の豚の骨を見つける。

その豚の骨の中でも頭蓋骨をよく見た男性は、なんだこりや、と首を傾げた。

豚の頭蓋骨には上側から大きな穴が空き、さらにその穴は黒く焦げた痕がある。

「念以外でどうやったらこうなるんだか……こりや、やったヤツを探すしかないなあ」

そう独りごちながら後頭部を掻き、男性ことジンフリークスは辺りの搜索を始めるのだった。